

史跡角冨言兌

市尾墓山古墳

6世紀前半に築造された、前方部を北西に後円部を南東にする前方後円墳です。墳丘の状態は、墳丘裾部が削られている以外は良好であり、現在墳丘上に樹木が一切ないこととも相俟って、墳丘の全体を明瞭に見ることができます。とりわけ前方部の遺存状態はきわめて良好であり、外郭線の直線的なはしりが手に取るように見られます。墳丘は2段築成で明瞭に段築面を残し、墳丘の長さは6.5mです。

石室は後円部の墳頂部に築造された横穴式石室で、石棺は凝灰岩で作っていて長さ210cm、幅79cm、深さ60cmで奈良県下でも最大級の刳抜家形石棺(くりぬき)です。石室内は殆ど盗掘されてしまっていたましたが、出土遺物の破片を復元した出土品は、ガラス玉・水晶玉などの玉類、馬具、刀、鉄鏃、円筒埴輪など多数ありました。被葬者は、巨勢氏の一族で6世紀初頭に活躍した巨勢大臣男人と考えられています。

市尾宮塚古墳

全長44mの前方後円墳で、後円部の横穴式石室は四角く削った巨石をやや内向きに積み上げた構造です。現在は、石室に近付くと自動的に照明がつき実物の石棺が見られるようになっていきます。時期は6世紀中頃と考えられ、飛鳥から紀州にあった古代の外港「紀伊水門」を結ぶ古代の道「紀路」沿いにあることから、「外交に従事していた豪族の首長の墓」であると考えられています。

横穴式石室からは、副葬品として、馬の装飾に使った金銅製の杏葉や刀の柄に装飾されていた水晶の三輪玉、金銅製の耳環、金銅製の鈴、冠を飾っていた銀製の歩搖と呼ばれる魚形の銀製品などが出土しました。金銅製の鈴は天理市のタキハラ一号墳に続いて県内では二例目で、いずれも盗掘の際に取り残されたとみられ、金銅製や銀製の馬具や太刀の装飾品など国際色豊かな副葬品が多数あり、遺物の豊富さは藤ノ木古墳を上回る内容があったことをうかがわせる古墳です。

被葬者はこの地一帯を本拠地としていた「巨勢氏」の一族であると考えられます。

波多甕井神社（はたみかいじんじゃ）

波多甕井神社は、天照大神を祀っていて、770年に創建され、859年に従五位上に昇叙(位が上がる)されました。従五位上の位は、個人で言えば貴族の範疇です。さらに、大宝律令の施行規則を制定している平安時代初期の延喜式と

いう規則集の中の神名帳に記載されている神社(式内大社)であり、高取町では唯一の式内大社として由緒ある神社です。神社の下方の字井戸谷には、老杉に囲まれた「太師井戸」と呼ばれる井戸があり、清水が湧き出しています。この清水が水利に不便な当地にあって、大切な水源(水甕)であったことから、甕井神社と呼ばれる由縁です。現在でも羽内の人々の飲料水に使われています。

日本書紀、巻第二十二、推古天皇二十年(612年)の箇所に「夏五月の五日に、葉獵す。羽田に集ひて、相連りて朝に参趣く。」という記述があります。解説すると、夏五月の五日に、波多甕井神社周辺(現在の地名でいうと高取町大字羽内から大字市尾辺りになります)で、壮大で華麗な宮廷行事として、鹿の若角をとったり、薬草の採取などを行いました。行事が終わり、諸臣は羽内(ほうち高取町大字羽内)に集まって一緒にになって、朝廷に参上した。という内容です。

森カシ谷遺跡

古代の官道(現代でいう国道)である「紀路」が見下ろせる丘陵上にあり、土郭、土塼、掘立柱建物、堀、柵の遺構が見つかっています。飛鳥中心部を見通せる立地であることや、交通の要所である紀路沿いにあることから、飛鳥を防御するための砦であると考えられています。7世紀後半ごろのものであると言われています。この南斜面には、7世紀末頃の「森カシ谷塚古墳」が見つかっております。文武・持統天皇の陵園想定地域内に位置することから、文武天皇の皇子・皇女クラスが、葬られている可能性があると考えられています。

岡宮天皇陵

現在岡宮天皇陵とされているのは、東明神古墳から南300mの高取町大字森に所在しています。これは、1862年(文久2年)に宇都宮藩が中心になって現岡宮陵の修陵が行われ、宇都宮藩による山陵修補関係図には、岡宮帝御陵之図というのがあり、この時期に陵が決められたらしいと思われます。

また、地元では、現岡宮陵の位置は素戔嗚命神社の本殿が鎮座していた所で、立ち退きをしてそこを陵としたということが言い伝えられています。

東明神古墳

東明神古墳は、高取町大字佐田に所在する春日神社の境内にあり、丘陵の尾根の南斜面に築造された7世紀代の終末期後半の古墳です。現状では墳丘がわずか直径10m程に見えますが、これは中近世の神社境内の整備のためであり、発掘の結果、対角長36mの八角形墳であったことが判明しています。

埋葬施設は、特殊な横口式石槨で、約厚さ30cm・幅50cm・奥行き50cm大の凝灰岩の切石を積み上げ、南北約3m・東西2m・高さは1.3mの所から内側に傾斜させた家型となっています。盗掘により天井部が破壊されていますが、推定で高さ約2.5mと考えられています。この石室は構築にあたっては極めて精巧な設計がなされていたらしく、黄金分割等を使っています。盗掘されているため、出土した遺物は少ないが、漆塗木棺破片や鉄釘や須恵器・土師器と人歯・骨などがあります。

被葬者については佐田の村に伝わる伝承に、幕末の頃までは、この古墳に玉垣をめぐらせていたが、明治時代になって岡宮天皇(草壁皇子)の御陵を指定するための調査を行うとの通知があり、当時佐田の村では春日神社横の古墳を岡宮天皇陵とのことで祭っていたが、これが正式に指定されると佐田の村は強制移住されるとの風聞が立ち、そこで村人は玉垣をはずし、石室を破壊してしまい、役人がやってきて鉄の棒を墳頂から突いたが石室にあらず、結局御陵は佐田の村の南300m森村の素戔嗚命神社の本殿の地と定められ(現岡宮天皇陵)、神社は東側に移動させられたことが伝えられています。

終末期古墳では、墳丘は30mと天武陵の45mに次ぐものであり、石槨は凝灰岩で作られてかなり緻密な構造になっており、出土品や歯牙の理化学的分析から青年期後半から壮年期にあたる年齢であるという考古学的事実と文献(万葉集・延喜式)や伝承等を合わせて総合的に判断すると東明神古墳は草壁皇子陵であるというのが現在の考古学・古代史双方の見方です。

橿原考古学研究所付属博物館で、この石室の復元した実物大の姿を見ることが出来ます。

キトラ古墳

所在地は明日香村大字阿部山ですが、その場所は高取町大字観覚寺の東際で高取町に向かって位置する古墳です。直径14m高さ3.3mで7世紀末から8世紀初頭に築造された横口式石槨の古墳です。

石槨内部の壁画は、有名です。天井に金箔を朱線をつないだ星座を表した天文図があります。キトラ古墳の天文図は、古墳に明確な星座を描いたものとして高松塚古墳に次いでわが国で二例目となります。外側の東に日像(太陽)、西に月像(月)を表現し、天の北極を中心として、一年を通して一度は見える星座の範囲全体を示した円形星座です。そこに描かれているのは中国式の星座です。古代の中国では天体の動きに従って人間の吉凶禍福が定められているものと信じられ

ていたため、天空の星座を、太陽が地球を中心に運行するように見える天球上の大円である黄道に沿って、天球を28に区分し、星宿(星座)の所在を明瞭にして、二十八宿を七ずつ四つに分け、その四つの星座がおかれた様態を玄武(北)、青龍(東)、朱雀(南)、白虎(西)の神獣とみたてて、それを方位の守護神としたのです。これにならい、北壁に亀に蛇がからまった「玄武」、東壁に「青竜」、南壁に「朱雀」、西壁に「白虎」と、それぞれの方位の守護神である「四神」が描かれています。

「四神」の下に人物像のような絵が何か所かにかすかに残り、獣の頭に人間の体をした「子(ネズミ)」などの十二支像(獣頭人身で表現し神像化された守り神)と推測される絵が描かれています。十二支とは、中国や朝鮮半島、日本など漢字文化圏で方位・時刻・年月日を表すものに使った十二種類の動物の名前です。十二支の方位思想とは、北から時計回りに30度ずつ「子、北」「丑、北北東」「寅、東北東」「卯、東」の順になり、方位の守りを意味します。十二支像は、四方の壁の四神の下に各三体ずつある可能性が高いと考えられます。「四神」及び「十二支」の方位思想は、古代中国から、朝鮮半島の三国時代である高句麗・新羅・百済を経て倭国にもたらされたものです。こうした方位神は、古代中国において、一切の万物は陰と陽の二気によって生じ、火・水・木・金・土の五行(万物組成の元素)中、火・木は陽に、水・金は陰に属し、土はその中間にあるとし、これらの消長によって天地の変異、災害、人事の吉凶を説明する陰陽五行説(わが国に伝来して陰陽道となる)とかかわっています。

キトラ古墳の被葬者は、死後もなお生前の威光と支配、永遠の栄光と安楽を欲して星図と四神図を墓室に描くことを切実に希求したものと思われます。それは生前の生活と思想のなかから育まれてきた被葬者の欲求と信仰であり、世界観であったものと思われます。被葬者は渡来系氏族である東漢氏の一族であると考えられます。

国府神社

大字下土佐字ナマコ山に所在する神社です。古代の国府(現在の県庁所在地)がこの付近にありました。坂上田村麻呂の祖父である坂上犬養が犬和守(現在の知事)に任命され、この大和国府に赴任し、故郷の高取町に錦をかざりました。山城(京都)・大和(奈良)の両国はともに宮都の置かれた地であり、当然のことながら、宮都の所在地との関係で、国府所在地にも何度かの移転があったと推測され、関連資料が少ないこともあって、両国国府の所在地には諸説があります。